

広島の惨状を忘れない

茂木 松雄（当時19歳）
札幌市

当時19歳の私は、1944（昭和19）年12月、静岡県磐田市にあった第1航空情報連隊へ情報兵として入営した。

翌1945（昭和20）年になると、アメリカのグラマン戦闘機が本州を襲うようになり、日本は敗戦に向けた坂を急速に下っていった。7月、航空警戒手となった私は、宮崎県日向住吉にあった情報隊から初年兵100名を預かり、陸路静岡へ引率する命令を受け、宮崎に出張した。宮崎からの帰路、3度グラマンの機銃掃射に遭遇した。下関でも機銃掃射を受けたので、大事をとって一時下車して待機した。8月6日のことである。そのまま広島に入らず待機したので、間一髪のところでは原爆の直撃を免れることができた。

待機している間に、広島市に新型爆弾が投下され甚大な被害を被っているとの情報が入った。詳しくはわからなかったが、「これは大変なことになった」ということは身体全体で感じた。それでも新兵を引率して帰らなければならないので8日の朝に汽車に乗った。ところが、広島駅は新型爆弾によって破壊されて列車は通行不能になっていた。やむなくひとつ手前の横川駅で下車し、線路上を歩いて広島に向かった。

歩いている途中、線路のかたわらに横たわっている子どもの死体が目に入り、足が止まった。しかし、どうすることもできないまま広島市に入ると、街は見るも無惨な廃墟と化していた。高い建物は何も残っていない。一望千里、焼け野原である。死体そのまま散乱し、さながら生き地獄であった。軍隊と地元消防隊が死体の収容にかかっていた。死体を山積みにしたトラックが目の前を何台も通過していく。午後3時過ぎに東京方面行きの列車が動き出したので私たちはそれに乗車し、静岡の本隊に着いたのは午後10時過ぎであった。今となっては、子どもをそのままにし、救助活動に携わることもできないまま原隊に復帰したことが

悔やまれてならない。

私は原爆の直撃を受けなかったので永い間被爆者手帳を持たなかったが、入市して放射能を浴びた者も第二号被爆者として認定を受けることができることを知り、当時行動を共にした班長が広島で健在であったので、証人になってもらって手帳の交付を受けた。

毎年8月6日が来ると、あの原爆投下直後の広島を思い出し、犠牲になった方々や戦友の冥福を祈っている。世界の人々にも、広島・長崎のあの惨状に思いをはせていただきたい。核兵器は二度と使ってはならない。

